

W. C. Williams の *Paterson*: 第3巻  
——“Beautiful thing” を求めて——

原 成 吉

The past above, the future below  
and the present pouring down: the roar,  
the roar of the present, a speech—  
is, of necessity, my sole concern .

*Paterson*

1

長編詩 *Paterson* の原型は、1927 年の *The Dial*<sup>1)</sup> に発表された “Paterson” という詩にみることができる。この作品で Mr. パタソンというヒーローが登場し、William Carlos Williams の代名詞ともいふべき “no ideas but in things” が産声をあげる。続いて 1936 年には “Paterson: Episode 17”<sup>2)</sup> が書かれ、これが第3巻に再び “Beautiful thing” のエピソードとして使われることになる。1936 年 11 月 6 日付けの Ezra Pound への手紙でウィリアムズは、「ずっと書きたいと思っていた最高傑作 ‘PATERSON’」のことを述べている<sup>3)</sup>。

第2次世界大戦後の 1946 年、長編詩 *Paterson* の第1巻がニュー・ディレクショナルズ社から出版され、ウィリアムズが 79 才の生涯を終えた 1963 年に第1巻から第5巻、それに第6巻の断片が1冊にまとめられて発表された。長編詩 *Paterson* が生まれる土壌として彼の最初の短編集 *Life along the Passic*

*River*<sup>4)</sup>、そして D. H. Lawrence が絶賛し、Hart Crane の *The Bridge* にも大きな影響を与えた作品、*In the American Grain*<sup>5)</sup> があったことは見逃せない。

長編詩 *Paterson* は、パウンドの *The Cantos* と並んで、アメリカのポスト・モダンの詩人たちの作品にも大きな足跡を残している。例えば Charles Olson の *The Maximus Poems* からは、ウィリアムズが *Paterson* で展開した地方都市のトポロジーを容易に見てとることができる。

長編詩 *Paterson* は、ニュー・ジャージー州の植民地時代からの古い歴史を持つ町、バタソンを共時的時間の中でとらえ、それを ideogram の手法で構成し歌ったものである。中心的テーマは、この詩の序文が示すように——「美の厳しさこそが探究のねらい。しかし聞く耳を持たぬ精神に閉じ込められた美を／どのように見つけようか」<sup>6)</sup> にある。その探究の方法としてウィリアムズは、自分の熟知している一つの具体的な都市を選び、その町の地形的特徴を横糸に、一方、町に生きる人々やその歴史を縦糸として使いながら言葉のタペストリーを織ってゆく。これが *Paterson* の ideogram の手法だ。そして素材はすべてアメリカの糸である。

織られたタペストリー、すなわち長編詩 *Paterson* は、伝統的な尺度からは美しいとは言えない。その理由は、この詩がアメリカの持つ破壊的要素を抱え込んでいるからに他ならない。アメリカ特有の暴力性はその歴史に溢れている。

しかし、この詩でウィリアムズは、新しい世界の美を発見するためには、それを閉じ込めている頑固な殻（ヨーロッパの伝統）を壊さない限り方法はないとみている。ウィリアムズの言う美の探究は、*Paterson* 第4巻で語られるキューリー夫人の瀝青ウラン鉱からラジウムを発見する過程にもたとえることができよう。新しい世界（アメリカ）の美とは、過去の遺物の中ではなく「ここそしていま」の卑俗なものの中にある。このことは、ウィリアムズの初期の詩、例えば、アメリカ現代詩の古典とも言える “The Red Wheelbarrow” (*CEP*, 277) などからもうかがえる。

Wallace Stevens はある友人にあてた手紙で、長編詩 *Paterson* を読んでいない訳を次のように述べている。「ウィリアムズは私の古くからの友人です。彼

### W. C. Williams の *Paterson*: 第3巻

を心から尊敬しています。しかし、彼の作品にはいつも読みづらさを感じます。彼の関心は、言うべき内容よりもその言い方にあるからなのです。読者は作家が何を言いたいかに深い関心を持っているのです。』<sup>7)</sup> スティーヴンズのこの言葉には、ウィリアムズの form への執着がうかがえて興味深いものがある。というのもウィリアムズは、「どう表現するか」、彼の言葉を借りれば、時代に合った measure をどうやって発明、あるいは発見するかという問題を死ぬまで追い求めた詩人だからである。彼がポスト・モダンの詩人たちに残した最大の遺産の一つは、form、すなわち彼の言う measure への関心と言っても言い過ぎではない。

この小論では、3つのセクションから成る第3巻のセクション1と2に、22回繰り返し使われている“Beautiful thing”という言葉に焦点を合わせ、長編詩 *Paterson* の美を考えてみたい。

## 2

「図書館」という副題のついた第3巻は、第1巻(1946年)、第2巻(1948年)に続いて1949年の11月に出版され、翌年には「全米図書賞」を受賞している。ニュー・ジャージー州、パタソンの町にあるダンフォース記念図書館で、Dr. パタソンはこの町に関する過去のドキュメントを読む。Dr. パタソンとは、この詩のヒーローであり、the city of Paterson、そして詩人ウィリアムズ自身であるとみてよい。第2巻の「日曜日の公園」という現実の世界から、広い意味で解釈すれば過去の文献の世界へ舞台は移ることになる。

この巻の序文でウィリアムズは、「都市は人間の精神にとって第二の身体である」(PA, 94) という George Santayana の小説<sup>8)</sup> の一節を使っている。この引用の意図は、Dr. パタソンとパタソンの町の同一性を再び読者に示すことにある。理想的に見れば都市は、それを取り囲む自然とその中に生きる人間の精神とつながっているというのが「第二の身体」の意味であろう。Lewis Mumford は *The Culture of Cities*<sup>9)</sup> の中で、「都市が芸術や秩序のシンボルでなくなる時、その機能は否定的なものになる。そして都市は崩壊の様相を呈し、

さらにその傾向は普遍的なものになってゆく。狭苦しい窮屈な場所には、常軌を逸した行為や悪癖がまたたく間に広がる」と述べている。長編詩 *Paterson* に描かれたパタソンの町は、否定的な機能を持った都市といえよう。多少誇張した言い方をすれば necropolis (大きな共同墓地) と化した megalopolis (巨大都市) である。

冒頭の詩句でウィリアムズは、第3巻の大きなテーマ “Beautiful thing” を象徴している花咲くニセアカシアを次のように歌う。

I love the locust tree  
the sweet white locust  
How much?  
How much?  
How much does it cost  
to love the locust tree  
in bloom? (*PA*, 95)

ニセアカシアが好きだ  
甘いニセアカシアの白い花が  
どれほど  
どれほど  
どれほどの代償を払えばよいのか  
花咲く、ニセアカシアを  
愛するには

それに答えて、「エイヴァリーが集めたよりも／もっと大きな富」<sup>10)</sup>(*PA*, 95) という声が返ってくる。ここで第1巻の「都市のような男、そして花のような女／——愛し合う男と女。／二人の女。三人の女。数知れぬ女たち、それぞれが花のよう。」(*PA*, 7) という言葉を考え合わせると、詩人はここで女性、すなわち美を歌い切る代償がいかに大きなものであるかを自問していると解釈で

きる。

最初の “Beautiful thing” は「傷ついた美」として表現される。

Beautiful thing,  
my dove, unable and all who are windblown,  
touched by the fire  
and unable . . . . (PA, 96)

美しいもの、  
無力な愛しいものよ、風にあおられ  
火に焼かれた  
無力なすべてのものよ

この「傷ついた美」は、Henri Toulouse Lautrec<sup>11)</sup> が売春宿の中から救いだした美と同様、現実の世界で傷つき隠されているものだ。

Dr. パタソンは、図書館で「1723年にワイス・ヒュイス近郊で殺された最後のオオカミ」(PA, 97)の記録や、「豚を殺したという濡れ衣を着せられ殺されたインディアン」(PA, 102)の記事を目にする。これらの過去のドキュメントは、プリミティブな自然環境の破壊の事実を伝え、この土地に植民した人々が抱いていた「文明化」への衝動を表している。また、「言葉もなく、野原で焼死した子供」や「互いに腕を取り合い、無言のうちに運河で水死した男と女」(PA, 98)の新聞記事は、第1巻のサム・パッチの場合と同様、言語によるコミュニケーションの失敗を連想させることから、この土地の人々の救済が詩人の言葉にかかっていることを暗示している。

図書館で過去の文献を読むうちに Dr. パタソンは、まどろみ、彼の心はさ迷う。すると、こんな声が聞こえてくる。

Doctor, do you believe in

“the people,” the Democracy? Do  
you still believe—in this  
swill-hole of corrupt cities?  
Do you, Doctor? Now? (PA, 108)

先生、信じるのですかい  
「民衆」とか民主主義とやらを。  
まだ、本当に——この  
ごみためみたいな町を。  
まだ、えー、先生。

この幾分 self-mockery を含んだ問いは、その土地の人々の言語を捜し出すという問題を彼につきつける。たたみかけるように、「おやめなさいよ／詩なんて。／あきらめなさい、にえきらない／芸術なんか。」(PA, 108) と忠告する女の声も聞こえてくる。

第1巻で示された、現実のパセイック川の滝の流れから意味を発見するという彼の仕事から逃げ出し、安らぎを求めて入っていった図書館の中で、Dr. パタソンは今まで以上に「ここそしていま」を歌うことの難しさを知る。

Dr. パタソンは、図書館の棚にぎっしり並んだ本が「炎ではなく／焼き尽くされて残った骸」(PA, 123) であることに気が付き、啞然とする。ここでは彼の求める生きた美はなく、かつて生きていた作家の魂が出口を求め高窓を叩いている。彼にとって図書館はいわば共同墓地と化す。

3

都市(男)と自然(女)の関係から考えてみると、Dr. パタソンが目にする過去のドキュメントは、全てマイナスのベクトルを示しているかのようにみえる。淀み、死の臭いを放っている、静かな図書館の中で彼の心は“Beautiful thing”へと動いてゆく。

W. C. Williams の *Paterson*: 第3巻

Beautiful thing:

—a dark flame,  
a wind, a flood—counter to all staleness. (*PA*, 100)

美しいもの

——暗い炎，  
風，洪水——新鮮さを失った全てのものへの逆襲。

この「炎，風，洪水」という“Beautiful thing”のイメージは、パタソンの町を実際に襲った災害と直接結びついている。「炎」は、1902年、2月8日、9日の2日間にわたって町のおよそ半分を焼き尽くした大火を、「洪水」はその翌月のパセイック川の氾濫を、そして「風」は前の二つの災害をまぬがれた地域を襲った、同じ年の大たつ巻をさしている。注目すべき事実は、ダンフォース記念図書館がこの大火で焼けていることだ<sup>12)</sup>。この長編詩 *Paterson* においても、ウィリアムズのフィールドワークを重視する“no ideas but in things”という彼の詩論がうかがえる。

これらの災害が起こった順序を入れ替え、ウィリアムズは第1セクションに大たつ巻を、第2セクションに大火を、そして第3セクションに洪水を、そのフレームワークとして使っている。この試論では“Beautiful thing”という言葉が使われているセクションだけに限定したため、第3セクションは割愛して論を進めることにする。

最初のセクションでは大たつ巻が描かれている。その描写の前に、「すべての宗教が／締めだした」(*PA*, 110) 美を救い出した画家、ロートレックを讃え、ウィリアムズはこんな声を挿入している。

Quit it. Quit this place. Go where all  
mouths are rinsed: to the river for

an answer

for relief from “meaning” (PA, 111)

やめてしまえ。この場所を出ろ。すべての口が  
ゆすげる所へ行け、川へ  
答えを捜しに  
「意味」を忘れて

Dr. パタソンは図書館を出る。「川」とは、第1巻に示されているように話し言葉の奔流、パセイック川であり、生命そのものと解釈できよう。「意味」とは、過去の文献の interpretation を暗示している。

これに続く詩句では、大たつ巻と詩人の想像力が重なり合う。

A tornado approaches (We don't have  
tornados in these latitudes. What, at  
Cherry Hill?)

It pours  
over the roofs of Paterson, ripping,  
twisting, tortuous:

a wooden shingle driven half its length  
into an osk

(the wind must have steeled  
it, held it hard on both sides)

The church  
moved 8 inches through an arc, on its  
foundations—



W. C. Williams の *Pateeson*: 第3巻

Hum, hum!

—the wind

where it poured its heavy plaits (the face  
unshowing) from the rock's edge—

where in the updraft,  
summer days the red-shouldered hawks ride  
and play

(in the up-draft)

and the poor cotton-  
spinner, over the roofs, preparing to dive

looks down

Searching among books; the mind elsewhere  
looking down

Seeking. (PA, 111-112)

大たつ巻が近づいている (この辺りは  
たつ巻は起きないはず。なに、いま  
チェリー・ヒルだって)

大たつ巻はパタソンの  
屋根に襲いかかる、引き裂き  
ねじれ、曲がりくねりながら

樫の木にその長さの半分まで突きささった  
屋根のこけら板

獨協大学英语研究

(風が板を鋼のように鋭く  
し、両面を堅くしたのだ)

弧を描き、  
基礎から8インチ動いた  
教会——

ふーん、ふーん!

——風

その中で、滝は編んだ重い髪を岩棚から(顔を  
隠して)流した——

そこで、上昇気流に乗って  
夏の日、赤い肩をした鷹が舞い  
上がる。

(上昇する風に乗って)

そして屋根を見下ろし、  
飛び込みの構えをしながら、あの哀れな紡績工は  
。 下を見る  
本の中を探しながらも、どこかで心は  
見下ろしている

探しながら。

ここに描かれた大たつ巻の持つ破壊力は、図書館の淀んだ空気を一掃してしまう。大たつ巻は、Dr. パタソン(すなわち詩人自身)の精神の在り方を具現化したもので、生命のぬけ殻と化した図書館の風とはいちじるしい対照を成す。

「基礎から8インチ動いた教会」という表現は、ぐらついた establishment を暗示しているかのようだ。上昇気流に舞う鷹のイメージは詩人の想像力を示し、それは哀れな紡績工、サム・パッチがパセイク川の滝で行った飛び込みのイメージに重なる。「紡績工」という言葉は、この町の主要な産業、綿紡績を指すことから、パタソンの町——Dr. パタソンという図式も考えられる。サム・パッチは、すでに第1巻で語られたように「飛び込み屋」の名をほしいままにするが、ジェネシー川のジャンプで失敗し命を落とす。その原因を詩人は、「言葉がサムを見捨てていたのだ」(PA, 17)とみている。ここで滝が現実の話し言葉であることを思い起こせば、Dr. パタソンのジャンプ、すなわち彼の美の探究にも同様の危険が伴うことがうかがえる。

これに続く第2セクションの冒頭の部分で、「書くこと」(writing) と「火」(fire) との同一性を詩人は歌う。この火のイメージは、北米インディアンの火の霊に呼びかける儀式へ展開される。ウィリアムズが引用しているこの火の儀式を語る散文<sup>13)</sup>からは、自然の中で生きる人々と都市に生きる人々とのコントラストが感じられる。このことは、インディアンが共有していた言葉と儀式がパタソンの町にはないことを示している。

さらにこの火のイメージは、1902年のパタソンの大火へと続く。実際の火事の様子を少し紹介しておこう。2月8日に発生したこの火事は翌日まで続き、近郊の町からの応援もあったが消火活動は思うようにはかどらず、風向きが変わってやっと下火になった。この火災の保険金として当時の金額で400万ドル以上が支払われ、多くの保険会社が倒産し経営困難に陥った会社も多数あったと伝えられている<sup>14)</sup>。

ウィリアムズは、なかばその火の持つ破壊力を受け入れるかのように歌っている。

An iron dog, eyes  
aflame in a flame-filled corridor. A drunkenness  
of flame. So be it. A bottle, mauled  
by the flames, belly-bent with laughter:

yellow, green. So be it—of drunkenness  
survived, in guffaws of flame. All fire afire!  
So be it. Swallowing the fire. So be  
it. Torqued to laughter by the fire,  
the very fire. So be it. Chortling at flames  
sucked in, a multiformity of laughter, a  
flaming gravity surpassing the sobriety of  
flames, a chestity of annihilation. Recreant,  
calling it good. Calling the fire good. (PA, 117)

炎にすっかりおおわれた回廊の中、  
鉄の犬、燃えるその目。我がもの顔の  
炎。いたしかたない。腹をよじらせ笑う炎に  
傷めつけられたビン。  
黄色、緑。いたしかたない——げらげら笑う炎、  
消えない我がもの顔の炎。燃え上がるすべての火  
いたしかたない。火を飲み込みながら。いたしかた  
ない。火が身をよじって笑う。飲み込んだ  
火が。いたしかたない。吸い込んだ炎を  
見て笑っている、さまざまな笑い、炎の  
平静さをはるかに凌ぎ燃え上がる  
重力、減びるものの慎ましさ。それをよしとする。  
びくびくしながら、火をよしとする。

この火の持つ破壊力の描写からは、大たつ巻のそれと同質のものが感じられる。

形あるもの全てを飲み尽くしてしまう炎の中に、Dr. パタソンは1本の古い  
ビンを見つける。

An old bottle, mauled by the fire

gets a new glaze, the glass warped  
to a new distinction, reclaiming the  
undefined. (*PA*, 118)

火に傷めつけられた古いビンに  
新たな光彩がうまれる、生まれ変わった  
歪んだガラスが、いまだ定義されぬものを  
生み出した。

彼の発見したこのビンは、一つの事物であると同時に、かつて作られ、すでにその機能を果たし今は火によって作り変えられるべき過去の遺物と言える。パウンドにならって言えば *make it new* すべきものである。「冷えるにつれて／そのガラスには、冷たい火が／描く同心円状の虹の様模」(*PA*, 118) ができる。このビンは一度は炎によって “deflowered” (*PA*, 118) され、そして “reflowered” (*PA*, 118) されたものだ。この再び花をつける炎をウィリアムズは “a second flame” (*PA*, 118) と呼んでいる。彼の言う「第二の炎」とは、火の持つ破壊力の中を生き残り、”Beautiful thing” をつかみとる詩的想像力のメタファーとみてよいだろう。「詩人は火のゲームの中で火に打ち勝つ」(*PA*, 118) という詩句からもこのことはうかがえる。この古いビンのエピソードは *destructive elements* の中から *creative elements* を発見する過程を伝えているといえよう。

現実の中にある卑俗なものの持つ美は、図書館の中の完全無欠な美を凌いでいる。しかし、その美をとらえることは、一瞬のうちに落下する滝の流れから意味を発見するのと同様に容易なことではない。現実の中でその美にまれに出会うことがあっても、次の瞬間にはもうその美は失われてしまう。勿論、とらえがたい美とは、現実の世界そのものではなく、その中に咲く花のようなものだ。

詩人がその美を言葉でしっかりとらえない限り、光を放っている美は消えてしまう。その例としてウィリアムズは、戦火の硫黄島でブルドーザーを操り、

仲間のために道を作った若い兵士の英雄的行為をとりあげ、次のように語る。

Voiceless, his  
action gracing a flame  
—but lost, lost  
because there is no way to link  
the syllables anew to imprison him (PA, 120)

声を持たぬ、若者の  
行為は炎を美しく飾る  
——しかし、消えてしまった、今はもう  
彼をしっかりと捕らえるシラブルを新たに  
繋ぐ術がなかったからだ

ここで語られているのは、第2巻に登場する巡回牧師、クラウド・エーレンの場合と同じように、言葉を救い出すこと (redeeming language) に失敗した例と考えられる。「詩人よ／おまえは、そこにいるのか？」(PA, 120) という詩句からは、ウィリアムズ自身のいらだちが感じられる。「言葉を救い出すこと」とは“Beautiful thing”を言葉でとらえることに他ならない。

次に、ウィリアムズは“Beautiful thing”を「傷ついた女性」のイメージで表現している。

Where is the pain?  
(You put on a simper designed  
not to reveal)  
—the small window with two panes,  
my eye level of the ground, the furnace odor . (PA, 125)

W. C. Williams の *Paterson*: 第3巻

どこが痛む。

(おまえはその痛みを隠そうと  
作り笑いをしたっけ)

——ガラス2枚の小さな窓、  
ぼくの目の高さにある地面、暖炉の臭い。

Dr. パタソンは、地下の穴ぐらのような部屋で、汚れたシートにくるまった黒人の女性を診察した時のことを回想する。

—for I was overcome  
by amazement and could do nothing but admire  
and lean to care for you in your quietness—

who looked at me, smiling, and we remained  
tuhs looking, each at the other . in silence .

You lethargic, waiting upon me, wating for  
the fire and I

attendant upon you, shaken by your beauty

(*PA*, 125)

——驚きのあまり、ぼくは  
ただ感心するばかり、そして身をかがめ静かな  
おまえの手当をした——

おまえは微笑を浮かべぼくを見た。二人はじっと、こうして  
見つめていた。黙って。

獨協大学英語研究

力なくぼくに受け答えし、火を待っている  
おまえ、そしておまえに付き添い  
その美しさに心を震わせるべく

「地獄のペルセポネ」(PA, 121)にも似たこの娼婦のような女性のイメージは、傷ついたユニコーンへと展開する。

A tapestry hound  
with his thread teeth drawing crimson from  
the throat of the unicorn (PA, 126)

タペストリーの猟犬の

鋭い歯はユニコーンの喉元から  
真っ赤な血の糸を引いている

このタペストリーとは、ウィリアムズがよく通ったメトロポリタン美術館の分館、クロイスターにある、「ユニコーン狩り」と題される7枚のタペストリーを指している。ウィリアムズは、さらにこの「ユニコーン狩り」のモチーフを第5巻でも描いている。この想像上の動物が「純潔・清純」の象徴であることを考え合わせると、血を流すユニコーンは、傷ついた“Beautiful thing”を意味するといえよう。

これに続く“Beautiful thing”のイメージは、この論の最初で紹介した長編詩 *Paterson* の原形となった作品“Paterson: Episode 17”で描かれた女性へと移っていく。この女性は、男たちに殴られ、傷つき、そしてその美しさの証として「つぶれた鼻」(PA, 127)を持つことになる。“Beautiful thing”は、破壊される運命にある。



ウィリアムズは、ロートレックと同じように、whore の中にある virginity というテーマを一連の “Beautiful thing” のイメージに織り込んでいる。これは卑俗なものの中に隠された美と言い換えることができよう。傷つきながらも、destructive elements の中を生き残った、これらの “Beautiful thing” は、キューリー夫人にとってのラジウムにたとえられる。ウィリアムズも何度も失敗を重ね、アメリカという瀝青ウラン鉱から、生命力の核 (“the radiant gist”) (*PA*, 186) を発見しようとする。以上見てきたように “Beautiful thing” のエピソードは、詩人ウィリアムズの卑俗なものの中にある美に対する愛の代償を物語っている。さらに補足すれば、この「代償」とは現実のパタソンの町が払ったものであり、サム・パッチの場合は彼の生命そのもの、そしてキューリー夫人について言えば、放射線病にむしばまれたその肉体ということになる。

ウィリアムズが詩人として支払った「代償」は、ニュー・ジャージー州、ラザフォードを生涯の地として選んだことに始まる。この詩に描かれたパタソンの町からパセック川を南に約5マイル下った所に位置するラザフォードは、ロンドンやパリとは全く違っていた。彼がパタソンやこの町の貧しい人々を診察したり、彼らの家へ往診に出かけていた1920年代、モダニズムの運動をリードした芸術家の多くは、当時のアウンギャルドと刺激し合いながら新しい芸術にじかに触れ、そこから自身の芸術を創造していった。ウィリアムズのいた環境は、この詩に描かれている町と同様、彼の求める芸術を容易に受け入れてくれない。産科・小児科の医者として忙しい毎日を送りながらも、彼は時間をみつければ、マンハッタンへ車を走らせ、ニュー・ヨークの画家や詩人たちと交際した。

ウィリアムズのいう “no ideas but in things” は、彼のこのようなライフ・スタイルから生まれたのではないだろうか。第3巻の “Beautiful thing” は、すべて具体的な事物で表されている。しかし、ウィリアムズは決して卑俗なものの中にとどまってははいない。ローカルなものへ下降 (descent) しながら、ユ

ニヴァーサルなものへ上昇 (ascent) していく。これがウィリアムズの詩の美学である。

一連の“Beautiful thing”の最後をウィリアムズは次のように歌いこのセクションを結んでいる。

I can't be half gentle enough,  
half tender enough  
toward you, toward you,  
inarticulate, not half loving enough (PA, 128)

ぼくの優しさはまだ不十分だ  
いたわりがまだ足りない  
おまえに、おまえに対して  
言葉は不明瞭なままだ、ぼくの愛はまだまだ足りない

ウィリアムズは、この捕らえがたい「おまえ」、すなわち American Beauty を彼の生涯をかけ言葉のタペストリーに織り込んでいった。そして、彼の抱いていたこのアメリカ詩のヴィジョンは、彼の後の世代の詩人たちに受け継がれていくことになる。

〔註〕

- 1) *The Dial*, 82 (Feb., 1927), 91-3. 後になってこの“Paterson”は、William Carlos Williams, *The Collected Earlier Poems* (New York: New Directions, 1951), pp. 233-35. に収録されることになる。以下このテキストからの引用は、CEPと略しその後にページ数を記す。
- 2) Paul Mariani, *A New World Naked* (New York: McGraw-Hill, 1981), p. 414. を参照。CEP, 438.
- 3) *The Selected Letters of W. C. Williams*, ed., John C. Thirlwall (New York: New Directions, 1984), p. 163.
- 4) Williams, *The Farmer's Daughters* (New York: New Directions, 1961) pp. 109-232.

W. C. Williams の *Paterson*: 第3巻

- 5) Williams, *In the American Grain* (New York: Albert & Charles Boni, 1925)
- 6) Williams, *Paterson* (Book One through Five) (New York: New Directions, 1963)  
以下このテキストからの引用は、PA と略しその後ページ数を記す。
- 7) *Letters of Wallace Stevens*, ed., Holly Stevens (New York: Alfred A. Knopf, 1981), p. 544.
- 8) George Santayana, *The Last Puritan: A Memoir in the Form of a Novel* (New York, 1936)
- 9) Lewis Mumford, *The Culture of Cities* (New York, 1938), P. 6. 尚, *Paterson* 第3巻を書いていた当時のウィリアムズのノートにこの本に関するメモがある。Benjamin Sankey, *A Companion to W. C. Williams's Paterson* (Univ. of California Press, 1971), p. 118. を参照。
- 10) Samuel Putnam Avery (1822-1904) を指す。彼はアメリカ生まれの著名な画商で、ニューヨークのメトロポリタン美術館の創設者の一人でもあり、長い間評議員を務め多くの美術品を収集した。
- 11) ウィリアムズは, *Paterson* 第5巻をこのフランス人の画家 Henri Toulouse Lautrec (1894-1901) に捧げている。
- 12) パタソンの町を襲った災害について、ウィリアムズの使った資料は、William Nelson and Charles A. Shrinier, *History of Paterson and Its Environs: The Silk City* 3 vols. (New York and Chicago, 1920), pp. 505-8. と考えられる。
- 13) Nelson, op. cit., pp. 37-8.
- 14) George Zabriskie, "The Geography of *Paterson*", *Perspective*, vol. VI, no. 4 (Autumn 1953), 214-15.

William Carlos Williams' *Paterson* Book Three  
Seeking "Beautiful thing"

Shigeyoshi Hara

*Paterson* Book Three consists of three sections. In the first section and the second, the phrase, "Beautiful thing" appears 22 times. Book Three considers the poet's (Dr. Paterson's) relationship to the past, and his quest for living beauty in the city of Paterson. At the end of Book Two Dr. Paterson runs into the library for respite from the roar of the Passaic Falls which represents the present speech, for assistance.

Throughout Book Three the poet examines the question whether the past documents (the books) he reads offer anything available for his quest for "Beautiful thing." The answer drawn from several events once happened to the city of Paterson is that the library or a "tradition" seems to be a tomb where the spirits of the writers in the past look for their outlets. But he admits the fact that his own age demands something new. And he starts from this recognition to invent a form (what Williams calls "measure") that will be appropriate to his own standing.

"Beautiful thing" means that which has survived the destructive elements. Focusing on natural disasters actually happened to the city in 1902, this paper concerns his aesthetics which is based on the interpenetration between "descent" and "ascent." It should be noticed that Williams employs concrete images of "Beautiful thing", and the images are often the feminine disgraced in this world. To discover his "Beautiful

W. C. Williams の *Paterson*: 第3卷

thing”, the poet makes a starts out of particulars and has to pay his “cost” of singing American Beauty.